

司式:中井龍太郎
奏楽:橋本恵美子

前奏:「おお汝、まことなる神よ」(J. ブラムス)

招詞: 神の家とは、真理の柱であり土台である生ける神の教会です。(1テモ 3:15b)

讚美歌 24「たえよ、主の民」

交読詩編 22:25-32

25 主は貧しい人の苦しみを/決して侮らず、さげすまれません。御顔を隠すことなく/助けを求め叫びを聞いてくださいます。

26 それゆえ、わたしは大いなる集会で/あなたに賛美をささげ/神を畏れる人々の前で満願の献げ物をささげます。

27 貧しい人は食べて満ち足り/主を尋ね求める人は主を賛美します。いつまでも健やかな命が与えられますように。

28 地の果てまで/すべての人が主を認め、御もとに立ち帰り/国々の民が御前にひれ伏しますように。

29 王権は主にあり、主は国々を治められます。

30 命に溢れてこの地に住む者はことごとく/主にひれ伏し/塵に下った者もすべて御前に身を屈めます。わたしの魂は必ず命を得

31-32 子孫は神に仕え/主のこを来るべき代に語り伝え/成し遂げてくださった恵みの御業を/民の末に告げ知らせるでしょう。

朗読聖書①イザヤ書 40:8-13

08 草は枯れ、花はしほむが/わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。

09 高い山に登れ/良い知らせをシオンに伝える者よ。力を振るって声をあげよ/良い知らせをエルサレムに伝える者よ。声をあげよ、恐れるな/ユダの町々に告げよ。見よ、あなたたちの神

10 見よ、主なる神。彼は力を帯びて来られ/御腕をもって統治される。見よ、主のかち得られたものは御もとに従い/主の働きの実りは御前を進む。

11 主は羊飼いとして群れを養い、御腕をもって集め/小羊をふところに抱き、その母を導いて行かれる。

12 手のひらにすくって海を量り/手の幅をもって天を測る者があろうか。地の塵を升で量り尽くし/山々を秤にかけ/丘を天秤にかける者があろうか。

13 主の霊を測りうる者があろうか。主の企てを知らされる者があろうか。

朗読聖書②ルカによる福音書 8:19-21

◆イエスの母、兄弟

19 さて、イエスのところに母と兄弟たちが来たが、群衆のために近づくことができなかった。

20 そこでイエスに、「母上と御兄弟たちが、お会いしたいと外に立っておられます」との知らせがあった。

21 するとイエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行く人たちのことである」とお答えになった。

祈 禱

ご在天の恵みに富み給う主なる神さま、聖霊降臨節第7主日の礼拝を、御堂に集い、またライブ配信を通して献げることが出来、感謝致します。

日々あなたに支えられながらも、託された務めを為すことなく御前に立つ私たちをお赦し下さい。

私たちは信濃町教会の伝道開始 100 年を迎えたこの6月、今日その最後の日を迎えております。一週間前の23日には、この教会を14年間牧されて来られた笠原義久牧師によって『告白する教会であり続ける』と題し、100周年記念講演4回最後の講演を戴きました。教会創立者高倉徳太郎牧師による『福音的キリスト教』の本質を聴き、その継承と展開の歩みについて丁寧に話し戴きました。私どもがどれだけこの歩みの重さ・大切さを理解して歩んで来たかは甚だ危ういものを感じるところではありますが、信濃町教会が信濃町教会であるためには、『告白する教会』であり続けなければならないという強いお勧めを戴きました。本当に感謝のことであります。

先頃行われた米国大統領候補二人によるディベート(debate)において、バイデン氏は“高齢不安あらわ”と評されました。その評は、あるいは現在の信濃町教会にも当て嵌まるかも知れません。しかし私たちはフェイル(fail)?であってはいけません。また、教会の新しい芽も芽生えてきているのではないのでしょうか。

明日からは7月、次の100年に向けての新しい第1頁が目の前に開かれています。今、歩み出す私たちに主の力強いお支えを祈り願います。

今朝立てられた説教者を感謝致します。御言葉を取次ぐ鮎川牧師に豊かに聖霊を降し、福音が強く語られますように。また聴く私たちを、御言葉を確かに受け取ることが出来ますようにお守りください。

これらの感謝と願い、主イエス・キリストの聖名を通してお献げ致します。アーメン。

讚美歌:206「七日の旅路」

説教:「神の家族」

鮎川健一

先週 24 日月曜日は、83 年前、日本基督教団が創立するにあたり、富士見町教会で総会が行われたことを思い起こす日でもありました。戦時下にあった当時、苦渋の選択を強いられたキリスト教会 30 教派が合同教会として新たな教団として宣教の道を歩み始めました。しかし現在に至るまで、夫々の教派の主張や、また置かれた持ち場立場の内実が異なるがため、様々な問題・課題が生じているのが現実で、なかなか解決されない保留状態になっています。夫々が、そのことであって悔い改めの意を心深く真剣に持ち、互いに歩み寄るこの姿勢を果たさなければなりません。明治期より宣教開始されて以来、主イエス・キリストを教会の頭とし、御体なる教会をキリスト中心にあらねば、今月の表題にもありますように、「真理の土台である生ける神の教会」とは成り得ない、その事を思い起こすものです。

そこで今朝の19節以下を見ますと、主が人々に教えておられる時に、母マリアと兄弟たちが来ました。それは元のマルコ福音書によれば(3:21)、うちの子が変になったと思って家に連れて帰ろうとしたものです。それからイエスを信じるように変えられたのは、あの復活の出来事に会ってからでした(1コリ 15:7)。私たちに照らしてみた場合ですが、もし自分の家族の中から世間を騒がす宗教家が出て、このように人々を集めて教えを宣べ始めたなら、おそらく同じような反応をするかもしれません。少なからず私なら 100 パーセント同じことをするでしょう。そう思いますし、今でこそ思われていませんが、私自身もこのような対象にあった時期がありました。キリスト教会とは関係ない家系の中において、学校に行ったからと言って礼拝に出席し、そして1回で済むものを毎週のように通い始めて、挙

句の果てには洗礼を受けてしまう。一家の長男としてあった者が、結果的にはキリスト教会に入り、また牧師になり、“じゃあ、このうちをどうするのだ”、ということにもなるのでしょうか。しかし私は、今でも家系ことを大事にしながら、ここに立っております。その中において住職の人たちとも会話を交わしながらここに立っているという現実もあります。

それはさておき、この時にあった主の口から重大な言葉が告げられました。「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行く人たちのことである。」と。この言葉によって、キリストの教会に集う者は、神の言葉を聴いて行く、そのことによって、主の兄弟姉妹となり、神の家族とされることが示されました。またユダヤに限らず民族国境を超え、更には社会的立場や身分を超えて一つの家族として、キリストの愛によって結ばれるキリストの教会が誕生したという証し的な出来事がここにあります。

聖書は実に不思議な書です。同じ話を聞いても受け取り方は千差万別です。普遍的絶対的な答えがあるわけでもないことが帰依しているのでしょうか。ここはその典型的な所の一つです。中には“イエスは自分の家族に冷たい。意外だ。”との反応があります。よく捉える一方で、躓く反応もあることは確かです。自分をどこに置いて読むかで受け方は格段に異なります。しかしこの場面では、主の教えに耳を傾けている者と重ね合わせて聴くことが重要です。それでも血を分けた家族の一員として理解することは普通のことにも思えます。主の発した言葉によって自分たちが最も大切だと考える家族の絆が壊される、このように感じるからでしょう。親からすれば、息子にこう言われたら心苦しいと受けしてしまうのです。しかし主は、家族を無にしているのではなく、当然ながら信仰継承を受けた父母を尊敬し、十戒の第5の戒を心深く持っています。

根本的な深い交わりがあるのが家族であるとは一般的な話でしょうけれども、現実的には私の家族がそうでしたが、何の問題もない家族はないでしょう。ましてや信仰・信条が根本から違えば、他人よりも関係が壊れることもあります。それが現実ではないでしょうか。聖書は理想主義、きれいごとではおさめません。創世記では、アダムとエバの間に生まれたカインとアベルは、兄が弟を殺すという結末でした。この話は有島武郎の文学作品『カインの末裔』に影響をもたらした題材ですし、またエサウとヤコブの兄弟は長子の権利をめぐる仲違いします。更にヤコブの息子たちは、やっかみ根性から弟のヨセフをエジプトに奴隷として身売りしました。聖書は実に悲惨な家族の物語を描きます。人間の深い闇を包み隠さず記すのが聖書です。聖書は、常に真実を表している書、時と場所を超えて語られる普遍的な真実、このことをも示します。聖書の現実主義、リアリズムがここにあります。ただ理想を掲げて人道的、道徳的に言うだけではどうにもならない深い現実に対し、ここでは新しい家族のあり様を示しています。それが“神の言葉を聴いて行く、神の言葉に聴き従う新しい家族の誕生がある”ということです。万国民族共通ですが、家族というものは生まれた時からそこに“ある”ものだと思っています。確かに家族はそこに“あり”ます。しかし神の御心に適った美しい家族に“なっていく”ためには、個人主義が表立っては究極的理想的な家族にはならないのです。家族は“ある”だけでなく“なっていく”という、この経過がなければ、家族が家族でなくなるのです。そもそも家族の定義は難しいですが、何か根本的にそのところで問われます。私もそのことで何10年も問い続けたことがあります。他のところでのカウンセリングの時にも“家族をテーマに”と言っても“家族って何で

すか”と聞いたところから始まって、しばらく時間を戴いたことがあります。ここでは深く追求する時間はありませんから押さえますが、教会に目を向けるならば、“教会は神によって造られた「神の家族」”です。

教会は様々な家族構成や、経験、また現実の姿そのものを背負っている人々が集められています。3世代、4世代の生活や、老いも若きも何らかの事情で独り暮らしであったり、子供が与えられない夫妻、互いに病気との闘いや介護の労苦にある生活など様々です。そこで教会の交わりの中で、これらの状況の中にある人々が、互いに補える関係が築き上げられるところにおいて教会は大きな役割を担います。大きな家族、一つの家族が造られるのです。そこで一人ひとりが育まれることが教会の理想的な姿でもあり、教会の根本的なあり方です。神の家族、兄弟姉妹というのは、決して理想主義にあるようなスローガンではありません。まさに日常的、具体的な私たちの交わりのあり様です。挨拶を交わして一日が始まる、そこで礼拝が始まる、祈り祈られての生活が始まるのです。

もう一度確認しますと、主はここで、神の言葉を聞いて行く人が“私の母、私の兄弟だ”と言われたのですから、私たちはどんなに親密な交わりをもっても直接の兄弟姉妹ではありません。法律的に当て嵌めての良し悪しではなく、私たちは、まず主イエス・キリストの母、兄弟、つまりキリストの家族となるのです。互いに信仰をもってキリストの兄弟姉妹となるが故に私たちは兄弟姉妹となるのです。キリストにつながるということが無ければ、決して、恐らく、一生涯と言ってもいいかもしれませんが、顔を見ることがなく何の関係もなくなってしまいます。互いにキリストの言葉に聞き従う中で、キリストに結ばれる中で結び合わされていく、という交わりが教会の中にあります。そこには、自分の我儘や、自分の罪も受け入れてもらえるはずだ、すべて許されるものだという甘えは絶対的に禁物です。我儘や罪と自らが奮闘しつつ互いに交わる、ということがなければ関係は崩壊しますし、声を大にして言う者の横暴が常態化します。互いにキリストに結ばれているならば、互いにキリストの言葉に聴き従っていく、この中で互いの欠けを支え合っていくとする交わりが生まれます。決して一方通行的なありようでは実現しません。常に上下関係、力関係が教会の中に存在するということになってしまいます。互いにキリストにあって、互いに自らの罪を自覚しつつ、祈りの家に交わりをもつことです。

使徒信条の中に、「我は聖霊を信ず、聖なる公同教会、聖徒の交わり」という文句があります。プロテスタント教会の伝統では、「聖なる公同教会」、それは「聖徒の交わり」を意味し、重なりと受け止めています。

教会は建物を指す以上に、信仰あつての交わりのことを意味します。信仰共同体です。それを信じるとはどういうことでしょうか。それは「聖霊を信じる」ということを前提としていることに注目です。つまり、私たちのこの交わりの中に、三位一体の第三格なる聖霊なる神が共に生きて働いておられるということ、私たちは信じるということです。単に父なる神や御子イエスを信ずるのみでは不十分です。どれも欠けることなく信ずるところに、全能の父なる神の働きが真実なる救いの御業の表れとして与えられてきます。父なる神、御子なる神、御霊なる神、この三つが一つとなしてある神が、キリストなる神であり、その御体なるところが教会である故に「我は聖霊を信ず、聖なる公同教会、聖徒の交わり」、この信条をもって正しく、心から信仰告白するところに置かれます。

そこで「交わり」と言う言葉は注意を要する言葉、出来事です。出会いが

「交わり」とは限定されません。むしろ教会的には『聖餐(ユークリスト)』が元にあつて、先の「我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり」このことを根幹に、それぞれの信仰的交わりがあるべき姿となります。聖餐による交わり、主の血と肉とに与る者は互いにキリストに結び合わされた者としての具体的な目に見える交わりを形成していくことになります。教会員に病人が出る、入院する人が出る、それを知らされた私たちがその人の為に祈る、そして機会があれば病室を訪ね、また共にそこで祈りを合わせる。そこに神の御霊が働いて信仰の交わりが深められていきます。交わりが真実になる所には、必ず重荷を担う人がいます。別にお金の問題ではなく時間も労も含めて何らかの重荷を負う人がいなければ、真実な交わりは成立しないということ、これが事実・現実です。家族もそうです。何よりも神の家族に連なる私たちは、まず、第一に、主が重荷を担って下さっていることに気づき受け止めることです。この恵みの上に置かれているのが私たち、信仰者の交わりです。この中からキリストの御業に重なるように重荷を担う人が起こされていくのです。正直なところ重荷は負いたくないと思うものでしょう。しかしキリストを知ったが故に変えられていくことである。神は出来ないことまでしなさいと無理強いは言われません。そう言うのは人間の身勝手さからくる毒舌の支配的な感情からくる言葉です。主は“出来ることは精一杯しなさい、その力は私が与える”と言われます。御霊なる神ご自身が共に働いて下さることを覚えて担うのです。自己主張の中には、神の存在はありません。

今朝、詩編交読をしました。初めの所をもう一度お読みします。(22篇)

25 主は貧しい人の苦しみを決して侮らず、さげすまれません。御顔を隠すことなく助けを求める叫びを聞いてくださいます。

26 それゆえ、わたしは大いなる集會であなたに賛美をささげ、神を畏れる人々の前で満願の献げ物をささげます。

27 貧しい人は食べて満ち足り、主を尋ね求める人は主を賛美します。いつまでも健やかな命が与えられますように。」

ここに神の国の写し絵が現れています。更に言うなれば、教会は神の国そのものではありません。神の国の息吹が神の御霊の働きによって吹いている所です。キリストの香りが満ちている所です。私たちの交わりは、この地上にある家族のようにあるのではなく、「キリストの血を分けた兄弟」となります。そして神の御国にある交わりを、この地上に写し出していく交わりを形成していきます。教会の外の人々には到底理解されない交わりです。過去以前に何度もあったことですが、教会の人たちと一緒に移動する時がありまして、信濃町ではまだありませんが、一般の電車やバスで出会う人々に驚かれ、半ば感心されるような反応をされることもありました。それは表から見れば理解できないほどの老若男女の構成になっているからです。小さい子どもからお年寄りまで、やっと歩けるような人たちまで混じっている中です。バスの中から色んな人たちが出て来る。ホームで待っている人たち、電車で会話を交わしている人たち、その人たちが一斉に、一団体としてなっている。沢山の人たちはびっくりするわけです。外からは私たちのつながりが見えないのです。教会は、一人ひとりが様々な問題・課題を持って日々の生活の中で疲れ果てた人々が礼拝に来て憩い安らぐ、そういう交わりです。その中で共に生かされている幸いを心から噛み締めるものでしょう。神の家族とされた者たちが共に祈り、神に应えてゆく志を新たにされて、教会からこの世に再び派遣されてゆく、この喜びを噛

み締めるものでしょう。

信仰の戦いは、日々苦闘・苦悶の中にあります。しかし祈りは時と場所を超えて用いられます。そして全能の神の力を信頼して、神の力に絶対的な権威を持つことを第一とします。信仰は、祈りを楯に、悪との闘いを続けます。「試みにあわず、悪より救い出されたまえ」、この祈りにあつて、神の家族とされた兄弟姉妹と共に終わりの日まで、主の証人として主を仰ぎ見つつ、祈り祈られながら、これからの日々を歩んで参りたいと願います。共に祈りを献げましょう。

恵と憐れみに富み給う主なる御神さま、恵みの内に新たな時を与えられ感謝致します。

永遠の命の源なる主よ、御霊の力と共に使命を担うことを全うすることが出来ますように。日々の歩みの中で、信仰に固く立つ畏れと勇気をお与えください。

夫々にある祈りと共に、信仰の友の祈りに合わせ、尊き主の聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讚美歌:536「み恵みを受けた今は」

献金・感謝(長原光)・主の祈り

恵みに富み給うご在天の父なる御神さま、聖霊降臨節第7主日礼拝を、ズーム配信にて、またこの場において、あなたに献げることが出来まして感謝致します。私たちは健康を支えられて、あなたの御言葉を、また礼拝を献げることが赦されていますが、様々な事情により、またご高齢や健康や、様々な理由により、あなたの御前に集えない兄弟姉妹のいることを覚えます。どうかあなたが、その場にあつて、夫々の方を平安の内に導いてください。

今朝私たちは、あなたの御言葉を行う者が血縁を超えてあなたの家族になることを教えられました。あなたは私たちのあらゆる功績とかではなく、あなたの一方的な愛によって、私たちがあなたの家族として呼び給う、そしてまたそこにあなたの教会を建ててくださいましたことを覚え、感謝致します。

日々、私たち拙い歩みを為す者ではありますが、あなたがどうか聖霊をもって導いてください。私たちは多くの物を与えられ、地上の歩みを為しておりますが、その中の一部を、あなたへの献身の徴としてお献げ致します。どうか聖めて、あなたの御国の建設のためにお使いくださいますように。

主イエス・キリストが私たちに教えてくださいました『主の祈り』をもって、この一巡りの歩みを歩ませてください。「主の祈り」…アーメン。

派遣:讚美歌 88「心に愛を」

祝福:主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わされていくあなたが一同と共に、今も後も永遠にあるように。アーメン。

報告:週報記載関連(1)説教を受けとめ祈る会(休止)、礼拝後清掃活動に合流。(2)北支区連合祈祷会説明。その他(1)配布プリント「難民向け献品」の説明、(2)大掃除実施要綱の説明。

後奏:「天の御国にいます我らの父よ」(J.B.パッハ)